横須賀市博研報(人文)　Rept.Yokosuka City Mus., No.(68):33-63.Mar.30, 2024

植物学者牧野富太郎博士からの手紙
ー当館初代植物学担当･大谷茂学芸員関係史料の紹介を中心にー

The letter from Dr. Tomitaro Makino
: A collection of the Shigeru Otani, the first curator in Yokosuka city museum

山本薫*・藤井明広**

KAORU Yamamoto, AKIHIRO Fujii

This paper introduces of reprint 11 letters written by Tomitaro Makino to Shigeru Otani between 1934 to 1948. Tomitaro Makino is one of world-famous botanists, and Shigeru Otani is the curator of Yokosuka city museum. These letters were exhibited at the first time in a planned exhibition “Plants observed by Tomitaro Makino -Messages of botanical specimens-” in 18, March 2023 to 18, June 2023.

はじめに

横須賀市自然・人文博物館（以下、当館）では、令和 4 年度の企画展として「牧野富太郎がみつめた植物ー植物標本が語るものー」（会期：2022 年 3 月 18 日-2023 年 6 月 18 日）と題した展示を開催した。当該展示では、博物館における植物学研究および植物標本の製作とその永久的な保管の重要性を伝えることを目的として、日本を代表する植物分類学者である牧野富太郎（1862-1957）の業績を紹介した。さらに、昭和 9 年（1934）から昭和 23 年（1948）にかけて牧野富太郎から当館初代植物学担当学芸員である大谷茂氏（1900-1981）（以下、大谷）へ送られた手紙 11 通や、牧野が神奈川県内で収集した植物標本等の展示を行った[1]。

本稿は、上述の企画展「牧野富太郎がみつめた植物ー植物標本が語るものー」において初めて展示公開された、牧野富太郎自筆の手紙について翻刻と簡単な解説を付して紹介するものである[2]。

---

*, **　横須賀市自然・人文博物館　Yokosuka City Museum, Yokosuka, 238-0016 Japan
原稿受付　2024 年 1 月 15 日　横須賀市 博物館業績　第 786 号
Key Word:　Tomitaro Makino, reprint, History of studies on flora of KANAGAWA, Miura Peninsula
キーワード：牧野富太郎　翻刻　植物調査史 三浦半島

１．大谷の経歴と牧野との交流

（１）大谷の経歴と教育活動【表 1】

大谷茂は明治 33 年（1900）、神奈川県都筑郡都田村（現･横浜市緑区）に生まれ、県内の高等学校教諭ならびに中学校校長を務めた。学校教育に従事する一方で、大正 8 年（1919）には横浜植物会に入会し､植物研究や植物民俗学の調査を精力的に行っていた。

不入斗中学校長であった昭和 24 年（1949）には、三浦半島研究会が設立され、大谷は同会の副会長に就任した。同時期に横須賀市郷土文化研究室研究員にも就いており、いずれも横須賀市博物館開館に向けて活動をされていた。昭和 27 年（1952）から逗子町立逗子中学校長（現・逗子市）を務める傍ら、同 29 年（1954）の横須賀市博物館開館時には横須賀市博物館研究員となった。昭和 34 年（1959）に逗子中学校を退職後、横須賀市博物館常勤嘱託となった。また、同年には「横須賀植物会」を設立し、会長に就任している。昭和 37 年（1962）に学芸員資格を取得し、同 44 年（1969）に横須賀市博物館学芸員となった。

【表1】大谷茂の経歴

和暦	西暦	月	項目	備考
明治33	1900	1	14日、神奈川県都筑郡都田村（現･横浜市緑区）に生まれる。	
大正8	1919	3	神奈川県師範学校本科第一部卒業。	
		3	神奈川県橘樹郡第一稲田尋常小学校訓導となる。	
		9	横浜植物会に入会する。	
大正12	1923	3	神奈川県橘樹郡鶴見尋常高等小学校訓導となる。	
大正13	1924	3	神奈川県橘樹郡鶴見尋常小学校訓導となる。	翌年、豊岡尋常小学校と改称
大正15	1926	3	横浜市西前尋常高等小学校訓導、兼任神奈川県立工業学校教諭となる。	
昭和3	1928	2	神奈川県立工業学校教諭となる。	神奈川県立工業学校在職中の昭和4年（1929）より3年間、牧野富太郎の自宅で直接植物学の指導を受ける。※要文言検討。
昭和11	1936	8	横須賀市立実科高等女学校教諭となる。	翌年、高等女学校と改称
昭和16	1941	4	横浜市立女子高等専修学校教諭となる。	
昭和19	1944	4	横浜市立第二女子商業学校教諭となる。	
昭和20	1945	3	横浜市立第一女子商業学校教諭となる。	
		5	29日、横浜空襲により自宅全焼。同年6月24日、生家に疎開。	
昭和21	1946	8	横須賀市視学となる。	
昭和22	1947	9	横須賀市立不入斗中学校長となる。	
昭和25	1950	11	神奈川県花制定審査員となる。	
昭和26	1951	5	神奈川県立三崎水産高等学校長となる。	
		8	神奈川県立横須賀高等学校教諭、兼任神奈川県教育研究所所員となる。	
昭和27	1952	5	逗子町立逗子中学校長となる。	昭和29年（1954）、逗子市となる。
昭和29	1954	4	横須賀市博物館研究員となる。	昭和32年（1957）、牧野富太郎没。
昭和34	1959	7	逗子町立逗子中学校　退職	
昭和34	1959	8	横須賀市博物館常勤嘱託となる。	
		11	教育勤続表彰（神奈川県教育委員会）。	
昭和35	1960	10	横須賀市教育委員会技術吏員（横須賀市博物館勤務）となる。	
昭和36	1961	3	文化財保護法施行10周年功労表彰。	
昭和37	1962	3	学芸員合格。	
昭和39	1964	6	横須賀市文化財専門審議委員（～7選）となる。	
昭和41	1966	9	神奈川県の木制定審査委員となる。	
昭和42	1967	2	横須賀市制60周年特別表彰（植物分類）。	
昭和43	1968	10	神奈川県明治100年表彰（自然科学の部）。	
昭和44	1969	4	横須賀市博物館学芸員となる。	
		6	横須賀市博物館を退職。	
		7	横須賀市博物館嘱託となる。	
昭和56	1981	1	死去（享年81）。	

出典：「大谷茂学芸員の業績」（『横須賀市博物館史料集 第1号』（横須賀市博物館、1978年））など。

大谷は、主に三浦半島はじめ神奈川県内のシダ植物に関する調査を実施した。特に横須賀市博物館研究報告（自然科学）に掲載された「神奈川県の羊歯植物（1）-（8）」（1966-1976 年）ならびに「神奈川県羊歯植物の分布と生態」（1978 年）[3]は当時のシダ植物相を知る貴重な情報となっている。

昭和 34 年（1959）に教育勤続表彰（神奈川県教育委員会）を受け、県内の学校教育に携わると同時に、同 42 年（1967）に横須賀市制 60 周年特別表彰（植物分類）、同 43 年（1968）に神奈川県明治 100 年表彰（自然科学の部）を受賞するなど、三浦半島はじめ神奈川県内の植物学研究に貢献した。昭和 56 年（1981）に亡くなる（享年 81）。

（２）大谷と牧野の関係

大谷が大正 8 年（1919）に入会した横浜植物会は、日本で最も古い野外植物愛好団体であるといわれている。横浜植物会の発足については、大谷が『横浜植物会年報第 2 号』において「1900 年頃に松野重太郎（1868 年-1947 年）が勤務していた都筑郡都田村池辺小学校川和分校（現在の横浜市緑区川和町）が横浜植物会発祥地の可能性がある」[4]と記している。この川和分校には、松野重太郎の他にも大谷毅（大谷の父）も勤務しており、牧野や寺崎留吉を招いて指導を受け、周辺地域の植物の研究を始めたことが記録されている[5]。これが明治 42 年（1909）の横浜植物会の設立につながったとされている。

横浜植物会設立時、世話役には松野重太郎が就き、指導者として牧野を迎えた。松野重太郎は、長く神奈川県立横浜第一中学校（現･希望ヶ丘高校）の教師を務めながら、『神奈川県植物目録』（1933年）[6]の編者となった（本著の序文は牧野が寄せている）。同会の世話役は、松野から大谷に引継がれ、大谷もまた牧野と交流を深めていた。

大谷は、昭和 4 年（1929）5 月から 3 年間、毎月第 3 日曜日の 18 時から 22 時まで牧野の自宅で植物学（裸子植物の系統分類について）指導を受けていたことがわかっている[7]。大谷は、昭和 7 年（1932）に初めての著作を牧野が創刊した植物研究雑誌に投稿しており[8]、以降、昭和 55 年（1980）まで 252 編の原稿を執筆している[9]。

２．牧野から大谷宛の手紙

本節では、牧野富太郎が大谷へ宛てた手紙の翻刻に解説を付して紹介する。【表 2】は、本稿において翻刻を掲載する手紙（封書と葉書）であり、各翻刻に付された番号はこの表に対応している。また、本稿で翻刻および解説を掲載した手紙の画像は本文のみ文末にまとめて掲載する。

【表2】大谷宛の牧野の手紙一覧

No.	和暦	西暦	月	日	表題	備考
①	（昭和9）	1934	12	18	（雑誌恵贈への御礼及び国府津での近況につき手紙）	
②	（昭和15）	1940	5	24	（植物写真恵贈への御礼状）	
③	（昭和15）	1940	5	30	（採集会お誘いに対する手紙）	
④	昭和17	1942	1	3	（戦時下での会合日程調整に関する手紙）	
⑤	昭和18	1943	2	7	（横浜植物会での厚遇への御礼等に関する手紙）	別紙①･②として牧野富太郎の句あり。
⑥	昭和18	1943	4	14	（肺炎の病状等に関する手紙）	別紙として牧野富太郎のサイン入り写真あり。
⑦	昭和19	1944	1	4	（戦時下において一同来駕の日程調整等に関する手紙）	
⑧	昭和20	1945	5	24	（疎開した旨を通知する葉書）	
⑨	昭和20	1945	7	15	（戦火による自宅焼失を見舞う葉書）	
⑩	（昭和21ヵ）	1946	6	25	（「牧野植物混々録」所望につき葉書）	
⑪	昭和23	1948	9	14	（大谷氏妻逝去を見舞う葉書）	

いずれも横須賀市自然・人文博物館所蔵。

※手紙・葉書内に年月日の記載がない場合には、通信日付印の年月日を採用している

【凡例】

・本文に日付が無い場合には、通信日付印の作成年月日を採用した。

・牧野富太郎の手紙原本は縦書きだが、本紀要書式の都合により横書きに改めた。

・原則として変体仮名は平仮名に改めた。

・原則として旧字は新字に改めた。

・縦書きで二字以上の繰り返しを示す「く」は、原文のまま表記した。

・句読点は必要に応じて翻刻者が補った。

・住所表記への句読点は除いた。

・（　）内は翻刻者の注記である。

・（ママ）は原文ママを示す。

・□は判読不能を示す。

・個人情報保護の観点から大谷の住所は大字までの記載とした。

①（昭和 9 年（1934））12 月 18 日付
（雑誌恵贈への御礼及び国府津での近況につき手紙）

【封筒表】

神奈川県立工業学校

大谷茂様

【封筒裏】

十二月十八日

〆

東京市板橋区東大泉町

五五七番地

牧野富太郎

【電話】石神井（シヤクジヰ）一五〇番

【本文】

先夜ハ失礼しました。南京街での御馳走
は誠においしくてありがとう御座いました。
御恵み下さいました創刊の「二渓苑」を電車
の中で拝見いたしました。私の事があると
承たまはりましたので見ない内から何とな
く嬉しいやうな感じかしてつらく拝
誦いたしました。
アナイに賞賛せられて書かれるととてもお恥
かしい感じがします。然し私といふものを理解
せられてあるのは何としても嬉しく読んてしま
つて感謝の念が油然として起り来りました。
ありがとう御座いましたがあまりホメ過ぎて
きまりがわるいやうに感じます。
右御礼を申上げます。
御自愛専一ニ願上げます。
又国府津で三、四日を過ごします。海を距てゝ
真正面に見える大島が時々海上のモヤで見えな
くなります。初島も同様です。海の静かな時は
砂浜際の波はあたかも湖のふちかのやうに感じ
られます。

十二月十八日夜

大谷賢台　　牧野富太郎

玉案下

【解説】

昭和 9 年（1934）12 月 18 日付の封書である。日付は封筒に押された通信日付印の日付を採用した。「南京街」（現・横浜中華街）でご馳走になったことに加え、創刊されたばかりの『二渓苑』なる雑誌を貰ったことに対するお礼、国府津（現・神奈川県小田原市）に滞在する旨が記されている[10]。ご馳走になったという「南京街」での会合は、同月 16 日に「横浜の会」（横浜植物会）の会合のため関東学院で講演と腊葉鑑定を行った後に行われたものと思われる[11]。また、『二渓苑』には牧野を称えるような記事が書かれていたようで、「アナイに賞賛せられて書かれるととてもお恥かしい感じがします。然し私といふものを理解せられてあるのは何としても嬉しく読んてしまつて感謝の念が油然として起り来りました。」と照れくさい気持ちとともに、感謝を伝えている。なお、雑誌『二渓苑』について詳細は不明であるが、当時大谷が教員として勤務していた神奈川県

立横須賀工業学校の同窓会が「二渓会」であることから、同校関係者による同人誌と思われる。

②（昭和 15 年（1940））5 月 24 日付手紙（植物写真恵贈への御礼状）

【封筒（表）】

横浜市神奈川区
鶴屋町［　　］
大谷茂様

【封筒（裏）】

五月廿~~五~~**四**日

㊞（※封緘印）

東京市板橋区東大泉町
五五七番地
牧野富太郎
【電話】石神井（シヤクジヰ）一五〇番

【本文】

尊書を忝く拝見いたしました。其后
御変りなく益御清適之段大慶に
存じます。扨今回はヒトツバショウマと
ヤハラシダ群生の写真を御恵み下さいまし
てありがたく存じます。ヒトツバショウ大分に
盛んに開花、御愛栽宜しきを得た結果と
存じます。私はまだ一回も其自生地へ到
つた事がないので一度は是非行かねばなら
んと希望してゐます。
池上本門寺のホソバイヌワラビは面白く存じ
ます。最早これが此羊歯の北限ではない
かと存じます。
横須賀山地のウラジロも珍しいと存じ
ます。

其内御目にかゝる事を楽（ママ）んでゐます。此頃は

時節が好いので何処へでも出て行きたくて仕方
がありません。箱根なども今頃は大変によい
と思ひます。
不取敢右御厚情之御礼を申上げます次第で
す。御自愛を祈ります。　　牧野富太郎
　　大谷賢台　机下

【解説】

昭和 15 年（1940）5 月 24 日付の封書である。本史料の日付は封筒に押された通信日付印の日付を採用した。大谷が牧野に送ったヒトツバショウマとヤワラシダ群生の写真に対するお礼などが記されている。話題は池上本門寺のホソバイヌワラビや横須賀山地のウラジロにも及んでいる。ヒトツバショウマは神奈川県と静岡県にのみ分布する日本固有種である。ホソバイヌワラビとウラジロは南方系のシダ植物であり、関東地方では多くない。また、「此頃は時節が好いので何処へでも出て行きたくて仕方がありません。箱根なども今頃は大変によいと思ひます」と自らの近状を書き送っている。

③（昭和 15 年（1940））5 月 30 日付（採集会お誘いに対する手紙）

【封筒（表）】

横浜市神奈川区
鶴屋町［　　］
　大谷茂様
　　貴酬

【封筒（裏）】

五月卅日
　　㊞（※封緘印）

東京市板橋区東大泉町
　　五五七番地
　　牧野富太郎
　　【電話】石神井（シヤクジヰ）一五〇番

【本文】

尊書を忝く拝見いたしました。
扨、今回ヒトツバセウマを御見せ下さる採集会
御催し下され、其日時を御知らせニ預り
誠に嬉しく存じます。然る処、私折

悪く来六月十五日後二十日までの間の何れ
かの日に東京を出発して大阪方面へ参る
事になつてゐますので御指示の六月廿三日も
同じく三十日も留守となります。私の帰宅
は多分六月末か七月始めにならうと存じ
ます。遅くはなりますが七月の十日以后の何れか
の日曜日になれは誠に好都合です。どうぞ
その様に御願ひしたいと存じます。
神中鉄道沿線鶴ヶ峰附近にカザグルマの
野生のある事はあってよいと思ひます。此品
は武蔵野原中でも諸所にあります。
不取敢右御返事を申上げました。

五月卅日

牧野富太郎

大谷賢台

机下

【解説】

昭和 15 年（1940）5 月 30 日付の封書である。本史料の記された年は封筒に押された通信日付印より判読した。大谷からのヒトツバショウマを見ることが出来るという採集会の案内に対して、大阪へ行く都合から別日であれば都合が良い旨を返信している。また、大谷から質問があったのであろうか「神中鉄道（現・相鉄線）沿線鶴ヶ峰（現・神奈川県横浜市旭区）附近にカザグルマの野生のある事はあってよいと思ひます。此品は武蔵野原中でも諸所にあります」と、カザグルマの植生についてあわせて回答している。前述のとおり、ヒトツバショウマは神奈川県と静岡県にのみ分布するとのことで、牧野は観察・採集を希望している。カザグルマは、現在、神奈川県内では横浜市保土ヶ谷区と相模原市のみに自生している。鶴ヶ峰は現在の自生地に比較的近いため、当時からの自生状況を示す資料となり得る。

④昭和 17 年（1942）1 月 3 日付（戦時下での会合日程調整に関する手紙）

【封筒（表）】

横浜市神奈川区
鶴屋町［　　］
大谷茂様
貴酬

【封筒（裏）】

一月三日

㊞（※封緘印）

東京市板橋区東大泉町

五五七番地

牧野富太郎

【電話】石神井（シヤクジヰ）一五〇番

【本文】

戦捷の新年御芽出たう御座います。
其后不相変御清適之段大慶ニ存じ
ます。扨先日は御書面下され忝く拝
見致しました。□□御返事差上ぐべき
の処彼此れ取紛れまして誠に御無
沙汰を申上げました。右御書面にて御申
越の事承知致しましたから其日が
極まりましたら二、三日前に何卒御知ら
せを願ひ上げおきます。体には例の
通り何の変つた事もありませんから
少々長く時間をとりましても何の疲れ
もありませんので其辺の御心配は何
にも入りません。それ故従来の会の
様な時間でも何等差支へはありません。
此頃は大分横浜へは御無沙汰致し居り
ましたので今回は久しぶりで諸君に御目
にかゝる事が出来大ニ 楽（ママ） んでゐます。

右は右乍延引御返事を申上げます。
時下御自愛専一ニ祈ります。

昭和十七年一月三日

牧野富太郎

大谷賢台　玉机下

【解説】

昭和 17 年（1942）1 月 3 日付の封書である。戦時下において横浜植物会と思われる

会合の日程調整を行っている。「此頃は大分横浜へは御無沙汰致し居りましたので今回は久しぶりで諸君に御目にかゝる事が出来」ると、久しぶりの会合であったことが窺える。また、「体には例の通り何の変つた事もありませんから少々長く時間をとりましても何の疲れもありませんので其辺の御心配は何にも入りません。それ故従来の会の様な時間でも何等差支へはありません」と、当時数えで 81 歳の自らの体調について語っている。なお、冒頭「戦捷の新年御芽出たう御座います」との時候の挨拶は、前年の昭和 16 年（1941）12 月 8 日に開戦した太平洋戦争緒戦での日本の勝利を指していると思われ、牧野の当時の戦争に対する認識を示す記述として興味深い。

⑤昭和 18 年（1943）2 月 7 日付（横浜植物会での厚遇への御礼等に関する手紙）

【封筒（表）】

横浜市神奈川区
鶴屋町［　　］
大谷茂様

【封筒（裏）】

二月七日
㊞（※封緘印）

東京市板橋区東大泉町
五五七番地
牧野富太郎
【電話】石神井（シヤクジヰ）一五〇番

【本文】

尊書を忝く拝見いたしました。其后御変り
なく益御健勝の段大慶ニ存じます。
扨先日横浜植物会の節は出ましていろくと
御優遇に預り、又御馳走に相成り感謝の至に堪
へませんでした。殊に伊達君に遠く拙宅まで御見
送らせ下さいまして誠に恐縮の至に存じます。
昨年御撮影之紀念すべき写真を御送り下さいま
して誠に忝なく存じます。長く保存致しおきま
す。
御尋の万葉植物に就ての私の発表はまだ極めて

僅かなもので、一両年前に土針（ツチハリ）の事を「短歌研究」へ書い
た事があります。昨年には万葉スガノミの新考と題し
て文藝春秋社発行の「オール讀物」に出しました。又先日ハ
ヤマヂサの事を「文藝春秋」へ出しておきましがこれは別
刷がありますから別封で差上げました。
牧野植物学全集いまだ少々間があります。どう
せ早くて本年の夏頃になりはせぬかと存じます。
其れが出る時ハ多分誠文堂の広告があらうと存じ
ます。
私の拙著をいろく御読み下さるとの事忝く存じ
ます。
別紙の歌はつまらぬものですが御笑草に進呈いた
しました。これはズット以前二月頃に鎌倉へ行つた
時のものです。当日は雪の降つたときです。箱根のは別
です。
先ハ右御礼旁た御返事まで申上げました。
昭和十八年二月七日　　牧野富太郎

大谷賢台
机下

【別紙①】

鎌倉にて　　牧野結網印
北向きに風に逆らひ
進み行けハ
吹雪は
衣真白にそする

【別紙②】

箱根にて　　牧野結網印
玉くしけ
箱根に生ふるはこね竹
風にゆさく
数もしられす

【解説】

昭和 18 年（1943）2 月 7 日付の封書である。横浜植物会の際に「御優遇」、「御馳走」を受けたこと等へのお礼、「万葉植物」（万葉集に登場する植物）に関する質問への回答を記すとともに、鎌倉・箱根で詠んだ自らの句を同封して送られた際の手紙である。横浜植物会での会合後には「殊に伊達君に遠く拙宅まで御見送らせ下さいまして誠に恐縮の至に存じます」とあるが、「伊達君」とは横浜植物会の幹事等を務めた伊達建夫氏と思われる。

別紙②の牧野の句について、「はこね竹」は箱根山の火山地帯に生育するハコネダケを指すと考えられる。本種が群落を成すため、その様子が印象に残ったのかもしれない。

⑥昭和 18 年（1943）4 月 14 日付（肺炎の病状等に関する手紙）

【封筒（表）】

横浜市神奈川区
鶴屋町［　　］
大谷茂様

【封筒（裏）】

〆
四月十四日　東京市板橋区東大泉町
五五七番地
牧野富太郎
【電話】石神井（シヤクジヰ）一五〇番

【本文】

拝啓、私二月廿四日頃から病気し肺炎になつてゐま
したが然かし日が立つに従ひ段々宜しく相成り
まだ床にはゐますが最早本月一杯もすれば床上
けが出来ると存じますから御安心を願ひます。
扨、右の如き有様にて其后大変に御無沙汰を申上げてゐ
ますが、其后御変りなく益御清祥之段大慶に存じ
ます。
先達而二月十日附の御書面疾くに拝見致し居りました
けれど、前述之如きさわぎで延引致し居りました。
御封中の写真へサインしましたから右御廻し申上げ
ます。御落手を願ひます。一部は難有拝受致しました。
御書面にありました私の原稿の朱字で訂正したものは
図鑑のものでこれ等は皆北隆館の所蔵となつてゐ

ますから御送りする事は出来ませんが別に私の原
稿の用済みのものがありますから別封で進呈し
ましたから御落手下さい。
愈々桜花の好い時節と相成りいろくの草は萌
え出でいろくの樹は芽を吹き、又日を逐而いろくの
花が咲きますのですが外出が出来ませんので毎日イラ
くしてゐます。五月になりましたなら始めて外へも
出られると思ひます。もう出たくて出たくて仕方があり
ません。病気ほど仕方のないものはありません。病人にな
つてはもう御仕舞です。健康は実に大事なも
のたる事は病気になつてつらくさう思ふ事です。
先は右まで申上げました。時下御自愛を祈ります。

昭和十八年四月十四日

牧野富太郎

大谷茂様

玉机下

【同封の写真（表）】

Makino
Tomitaro
Age 81 old

【同封の写真（裏）】

昭和十八年一月卅一日撮影　先生八十二才
横浜市中区山下町二三一
横浜市立女子高等専修学校
校長室ニテ　（横浜植物会ニ御招キシテ）
表記サインニ八十一才トアルハ誤ナリ
昭和十七年二月一日撮影ノモノト同封シテ
郵送サインヲ求メシタメカク誤リタルナリ
コノ事ハ昭和十八年四月十四日付ノ先生ヨリノ
葉書ニテモ知ラル　　大谷　誌ス

【解説】

昭和 18 年（1943）4 月 14 日付の封書である。大谷が同年 2 月 10 日付で同封の写真へのサインと牧野の直筆原稿を所望したことに対する返信とみられる。直筆原稿につい

ては、牧野の著作物を多く出版していた北隆館の所蔵となっているため送れないとし、代わりに自身手持ちの用済み原稿を送付すると述べている。また、本史料には牧野が 2 月 24 日頃から体調を崩して肺炎となっていたことが記され、故に大谷への返信が遅くなった旨を伝えている。この時、数えで 82 歳の牧野は近況について「愈々桜花の好い時節と相成りいろくの草は萌え出でいろくの樹は芽を吹き、又日を逐而ハいろくの花が咲きますのですが外出が出来ませんので毎日イラくしてゐます。五月になりましたなら始めて外へも出られると思ひます。もう出たくて出たくて仕方がありません」と記し、さらに「病気ほど仕方のないものはありません。病人になつてはもう御仕舞です。健康は実に大事なものたる事は病気になつてつらくさう思ふ事です」と健康の大切さについて語っている。また、同封されたサイン入りの写真の表面には誤った牧野の年齢が記されていることを裏書している。几帳面な大谷の性格が窺える。

⑦昭和 19 年（1944）1 月 4 日付（戦時下において一同来駕の日程調整等に関する手紙）

【封筒（表）】

横浜市神奈川区
鶴屋町［　　］
　大谷茂様
　　貴酬

【封筒（裏）】

一月四日
　　㊞（※封緘印）

東京市板橋区東大泉町
　　五五七番地
　　牧野富太郎
　　【電話】石神井（シヤクジヰ）一五〇番

【本文】

尊書を忝く拝見いたしました。
聖戦之新春を芽出度御迎への段御慶び
申上ます。私も頗る頑健に高齢を加へましたから
御休神を願上げます。
御書面によれバ本月下旬頃之日曜に御一同
御来駕下さるとの御事御待ち致し居り
ます。就てハ廿三日之日曜なれバ私方は都合

がよいですが若し御差支へあれバ卅日の日曜に
すれバ宜しと思ひます。右両日の内何れか
に御取極めに相成り予じめ御知らせおき下さ
るれバ大幸の至に存じます。
先ハ不取敢右御返事まで申上げました。
御自愛を祈り上げます。
昭和十九年一月四日
牧野富太郎
大谷賢台
机下

【解説】

昭和 19 年（1944）1 月 4 日付の封書である。詳細は不明ながら、大谷らが牧野のもとを訪問する際の日程調整に対する回答を記している。本史料では、冒頭の「聖戦之新春を芽出度御迎への段御慶び申上ます」に始まる時候の挨拶に続けて、「私も頗る頑健に高齢を加へましたから御休神を願上げます」と、数えで 83 歳の自身の体調について記している。

⑧昭和 20 年（1945）5 月 24 日（疎開した旨を通知する葉書）

【葉書（表）】

神奈川県横浜市
神奈川区鶴屋町［　　］
大谷茂様
山梨県北巨摩郡
穂坂村宮久保横森保義氏方
牧野富太郎
昭和廿年五月廿四日

【本文】

拝啓、其后御異條（常）はありませ
か。精々御自愛且つ偏に御要心の
程を願上げます。私は今回肩書
の処へ疎開し参りましたので御安心の
程を願ひます。横浜植物会員の他
の御方へ御序がありましたなら御知らせお

きを願ひます。先ハ不取敢右知らせまで
申上げました。

【解説】

昭和 20 年（1945）5 月 24 日付の葉書である。山梨県北巨摩郡穂坂村宮久保（現・山梨県韮崎市）の横森方に疎開したことが記され、あわせて大谷より他の横浜植物会員へもついでがあればその旨を伝えてくれるよう依頼している。牧野は、自宅の門付近に爆弾が落ちたことなどもあり、昭和 20 年（1945）5 月 12 日に自宅のある大泉から穂坂村へ疎開していた[12]。

⑨昭和 20 年（1945）7 月 15 日付（戦火による自宅焼失を見舞う葉書）

【葉書（表）】

神奈川県横浜市
港北区池辺町［　　］
大谷茂様　　昭和廿年
七月十五日
山梨県北巨摩郡穂坂村
宮久保横森保義氏方
牧野富太郎

【本文】

拝啓、御葉書拝見いたしました。それに
よれば従来の御住家は戦火の為め御焼失と
の事、誠に御気の毒の至に存じ乍延引御見
舞申上げます。それでも幸いに御体は御安泰なり
し御様子御不幸中の幸と存じます。書物な
ど大部分御焼失之由、それでも牧野全集、研究雑誌御持
ち出されし由、私までも嬉しく存じます。戦後は
又新しく出発する事です。今ハ汽車（難ヵ）□ ですから懇談
会も催し難く残念の至ニ存じます。私は今多年集
めし植物方言の整理をやつてゐます。方言は実に無限にある
ものです。過日甲府が焼［　］から同方面は大変です。
何かと御不自由と御察し致します。切に御自愛を祈ります。

【解説】

昭和 20 年（1945）7 月 15 日付の葉書である。戦災のため大谷の住居が焼失したこと

へのお見舞いとともに、自らは疎開先で「植物方言」の整理を行っているという近況を伝える。大谷は、同年 5 月 29 日の横浜空襲によって横浜市内にあった住居が全焼したため、同市内の生家に疎開していた。牧野は「それでも幸いに御体は御安泰なりし御様子御不幸中の幸と存じます。書物など大部分御焼失之由、それでも牧野全集、研究雑誌御持ち出されし由、私までも嬉しく存じます。戦後は又新しく出発する事です」と、大谷自身の無事を喜ぶとともに、すでに「戦後」における植物学研究の再出発について言及している。

⑩葉書（(昭和 21 年（1946)）6 月 25 日付）（「牧野植物混々録」所望につき葉書）

【葉書（表）】

横浜市港北区
池辺町［　　］
　大谷茂様

東京都板橋区東大泉町
五五七番地
六月廿五日　　牧野富太郎
［電話］石神井（シャクジヰ）一五〇番

【本文】

蓮の会へはよう参りません。　御自愛を祈ります。
御葉書を拝見いたしました。益御安泰の
赴（趣）大慶ニ存じます。私も幸に無事に過ごし
居りますれバ御休神下さい。過日ハ戦後第一回の
採集会を催されし由御祝申上げます。私の新雑
誌「牧野植物混々録」書肆ゟ貰ひしもの控を残して皆他
へ進呈して全手許に無く相成りましたので残念ながら差
上げる事が出来なく相成りました。発行書店（神田区駿河台二丁目一〇、鎌倉書房、
定価一円五十銭、送料
二十銭）にはまだあるであらうと存じますから若し御入用
なら前金で御申込みになれば送つて来ると存じます。
発行所の希望ハ可成六号分として十円二十銭を払ひ込む
事を希望してゐるやうに書いてあります。

【解説】

昭和 21 年（1946）6 月 25 日付の葉書である。戦後初めての横浜植物会の採集会開催を喜ぶとともに、大谷から所望のあった『牧野植物混々録』（昭和 21 年（1946）、第 1

号刊）の入手方法について回答している。また、追伸には「蓮の会へはよう参りません」と会合への欠席を伝えている。なお、管見の限り本史料には通信日付印が確認できない。そこで、本史料の年については、昭和 21 年（1946）に刊行された『牧野植物混々録』を「新雑誌」と述べていること、牧野の住所が「板橋区」から「練馬区」（昭和 22 年（1947）に板橋区から独立）になっていないことから「昭和 21 年（1946）」と推定した。

⑪昭和 23 年（1948）9 月 14 日付（大谷氏妻逝去を見舞う葉書）

【葉書（表）】

横浜市港北区池辺町

［　　］

大谷茂様

（朱印）「練馬区」

東京都~~板　橋　区~~東大泉町

五五七番地

牧野富太郎

【電話】石神井（シャクジヰ）一五〇番

【本文】

拝復、先日の御葉書拝見いたしました。
右御書信によれば御令閨様の御病気一入
御手を御尽くしになられしに拘はらず遂に御遠
逝之由御落胆の程深く御察し申上げます。
私も大学病院で愛妻を失ひし経験を以てゐますが其当
分の間は見るもの聞くもの皆哀傷のたねならざる
ものはない有様です。右偏に御同情申上げます
次第です。どうもこれも天命と御思召し心を
落さず雄々しく勇ましく持たれん事を御願
ひいたします。先ハ乍延引右御見舞申上げます。
昭和廿三年九月十四日

【解説】

昭和 23 年（1948）9 月 14 日付の葉書である。大谷の妻が亡くなったことへのお悔やみと励ましの言葉を記している。牧野自身も昭和 3 年（1928）2 月に妻･寿衛子（1873-1928）を亡くしているが、その時の気持ちについて「其当分の間は見るもの聞くもの皆哀傷のたねならざるものはない有様です」と記して同情を寄せるとともに、「どうもこ

れも天命と御思召し心を落さず雄々しく勇ましく持たれん事を御願ひいたします」と大谷を励ましている。

おわりに

本稿では、当館の初代植物担当学芸員となる大谷と牧野富太郎の交流について紹介するとともに、牧野自筆の手紙について翻刻と簡単な解説を付して掲載した。以下、本稿の成果をまとめると次の通りである。

①牧野の功績の一つとして、一般への植物学に関する知識の普及がある。牧野の指導を受けた「横浜植物会」は、牧野没後も活動を続け、その活動は現在も地域の植物相調査に貢献している。また、「横浜植物会」の一員であった大谷個人も牧野による指導を受けた後に業績を重ね、地域の植物研究の進展に寄与した。本稿では、当時の神奈川県や三浦半島における植物研究が牧野との交流とともにあったことがわかる。

②牧野には『植物記』(桜井書店、1943 年) や『牧野富太郎自叙伝』(長嶋書房、1956 年) など、自身の生涯や植物に対する想いを語った著作が多数出版されている。本稿で紹介した牧野の手紙は、自叙伝等に記された牧野の行動や想いを補完するものであり、牧野の日常における姿や植物学研究のあゆみについてその一端が窺えた。

以上、本稿の成果からは学芸員による調査･研究の蓄積、資料の収集および永久的な保管の意義について改めて認識することができる。

---

[1]牧野富太郎は、明治から大正・昭和の長きにわたり活躍した高知県出身の植物学者である。近代植物学を独学で学び、日本産の植物を調査研究して、その成果を世界に広く多く伝えた。牧野は多くの植物を記載した他、植物図鑑の刊行、学術雑誌の発刊、植物学の普及啓発活動など日本の植物分類学に貢献した。

[2]本稿で紹介する史料は大谷学芸員が牧野富太郎と交流する中で作成されたものであり、現在は大谷氏ご遺族からの寄贈によりいずれも当館の所蔵である。

[3]大谷茂「神奈川県の羊歯植物 (1)」(『横須賀市博物館研究報告 (自然科学)』第 12 号 (横須賀市博物館、1966 年))、p31-51、同「神奈川県の羊歯植物 (2)」(『横須賀市博物館研究報告 (自然科学)』第 13 号 (横須賀市博物館、1967 年))、p55-75、同「神奈川県の羊歯植物 (3)」(『横須賀市博物館研究報告 (自然科学)』第 14 号 (横須賀市博物館、1968 年))、p62-80、同「神奈川県の羊歯植物 (4)」(『横須賀市博物館研究報告 (自然科学)』第 15 号 (横須賀市博物館、1969 年))、p66-92、同「神奈川県の羊歯植物 (5)」(『横須賀市博物館研究報告 (自然科学)』第 16 号 (横須賀市博物館、1970 年))、p44-57、同「神奈川県の羊歯植物 (6)」(『横須賀市博物館研究報告 (自然科学)』第 18 号 (横須賀市博物館、1971 年))、p64-68、同「神奈川県の羊歯植物 (7)」(『横須賀市博物館研究報告 (自然科学)』第 19 号 (横須賀市博物館、1972 年))、p23-29、同「神

奈川県の羊歯植物 (8)」(『横須賀市博物館研究報告 (自然科学)』第 22 号 (横須賀市博物館、1976 年))、p1-24、同「神奈川県羊歯植物の分布と生態」(『横須賀市博物館研究報告 (自然科学)』第 24 号 (横須賀市博物館、1978 年))、p51-58。

[4]大谷茂「古きをたずねて－横浜植物会の前身とその半世紀」(『横浜植物会年報』第 2 号 (横浜植物会、1973 年))、p3-18。

[5]村上司郎 2001. 神奈川県植物研究史(2)〈改訂〉. 神奈川県植物誌調査会編. 神奈川県植物誌 2001. 1478

[6]松野重太郎編『神奈川県高植物目録』(神奈川県植物誌調査会、1933 年)。

[7]石渡治一「大谷茂先生の逝去を悼む」(『横須賀市博物館館報』第 28 号 (横須賀市博物館、1982 年))、p36。

[8]大谷茂「富嶽の北麓河口村に遊ぶ (河口村の民俗)」(『植物研究雑誌』第 8 巻 第 3 号 (津村研究所出版部、1932 年))、p137-144。

[9]前掲、石渡治一「大谷茂先生の逝去を悼む」(『横須賀市博物館館報』第 28 号 (横須賀市博物館、1982 年))、p36。

[10]昭和 9 年 (1934) 12 月、牧野は 7-8 日、12-16 日、20-26 日とたびたび国府津に滞在をしている、山本正江・田中伸幸編『牧野富太郎植物採集行動録・昭和篇』(高知県立牧野植物園、2005 年)、p78。

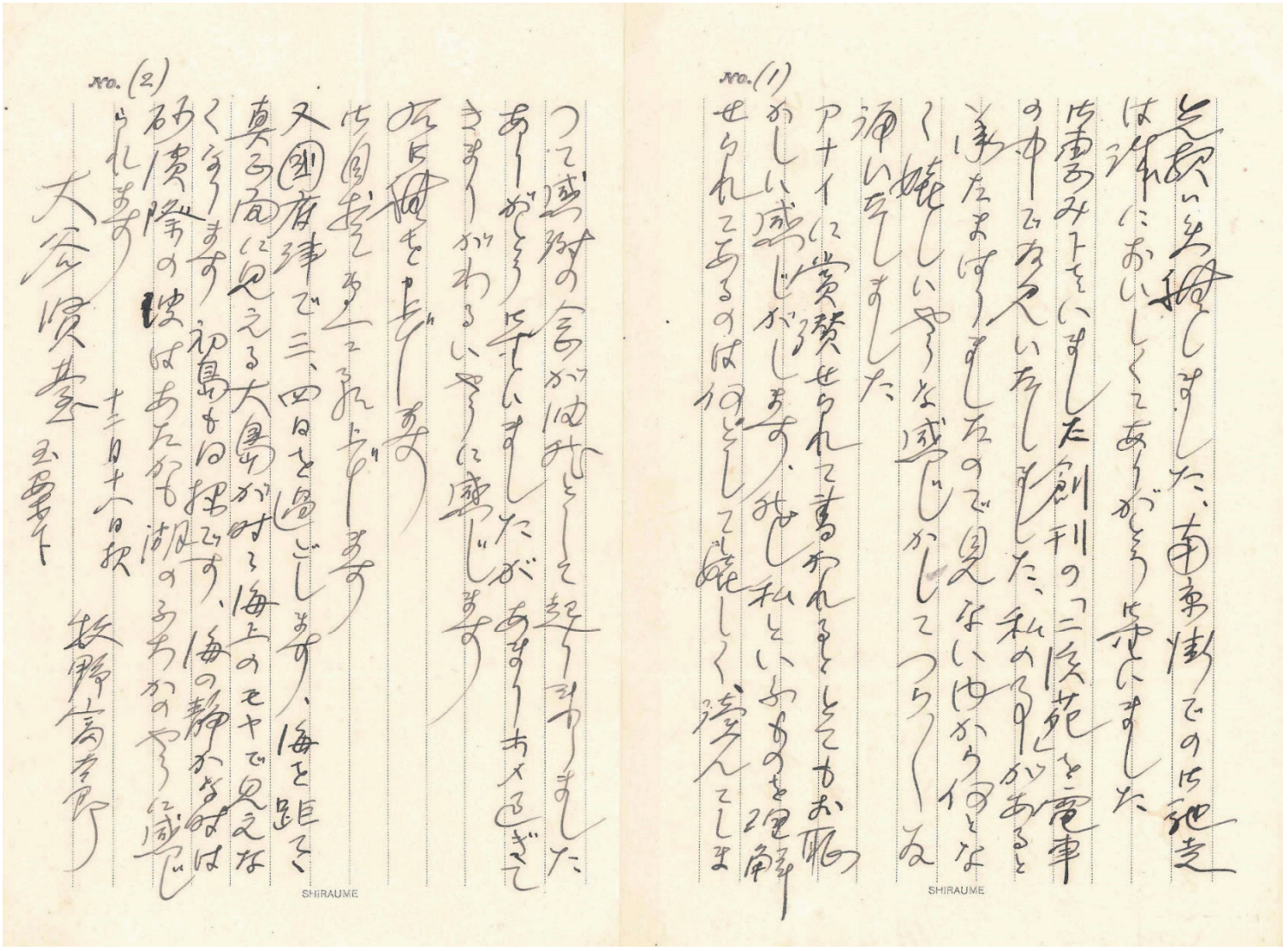
[11]昭和 9 年 12 月 16 日条には「横浜の会。国府津-横浜 朝国府津より横浜ニ下車、福田氏ニ迎へられ関東学院の会場ニ行き講演と腊葉鑑定を行ひ、日晩れ小南京街の金陵支那料理店にて馳走ニなり順路帰宅す」とある、山本正江・田中伸幸編『牧野富太郎植物採集行動録・昭和篇』(高知県立牧野植物園、2005 年)、p78。

[12]牧野の疎開に関する経緯や動向に関しては、牧野鶴代「父の素顔」(牧野富太郎『牧野富太郎自叙伝』(講談社学術文庫、2004 年))、田中純子・伊藤千恵「牧野富太郎の「疎開日記」」(高知県立牧野植物園編『やまとぐさ』第 3 号、2020 年) などに詳しい。

付記

本稿作成に当たっては、根本秀一氏に資料の提供を受けた。末筆ながら記して感謝申し上げたい。

①（昭和９年（１９３４）１２月１８日付（雑誌恵贈への御礼及び国府津での近況につき手紙）



No.(1)

とゝろいろ拝しました、南東樹での生活は淋しくておいしくてありがたう暮しました

雪みちといひました創刊の「三匹苑」を電車の中でなつかしいたした、私の名前があると涙たまはりましたので見ないゆかうなく嬉しいやうな感じがしてつらくなる程いたしました

アナイに賞賛せられて書かれることもお恥かしい感じがします、私といふものを理解せられてあるのはほんとうに嬉しく強んでします

SHIRAUME

No.(2)

つて感謝の言葉が胸一杯となって起り引りました

あーがたう暮しいましたがあすーあメ過ぎてきますりがわるいやうに感じます

五月雨を上げます

五月雨を上げます

又国府津で三、四日を過ごします、海を距て真正面に見える大島がまゝ海上のモヤで見えなくなります、初島も相模灘、海の静かなのは砂漠陽の波はあたかも湖のごとかのやうに感じられます

十二月十八日夜

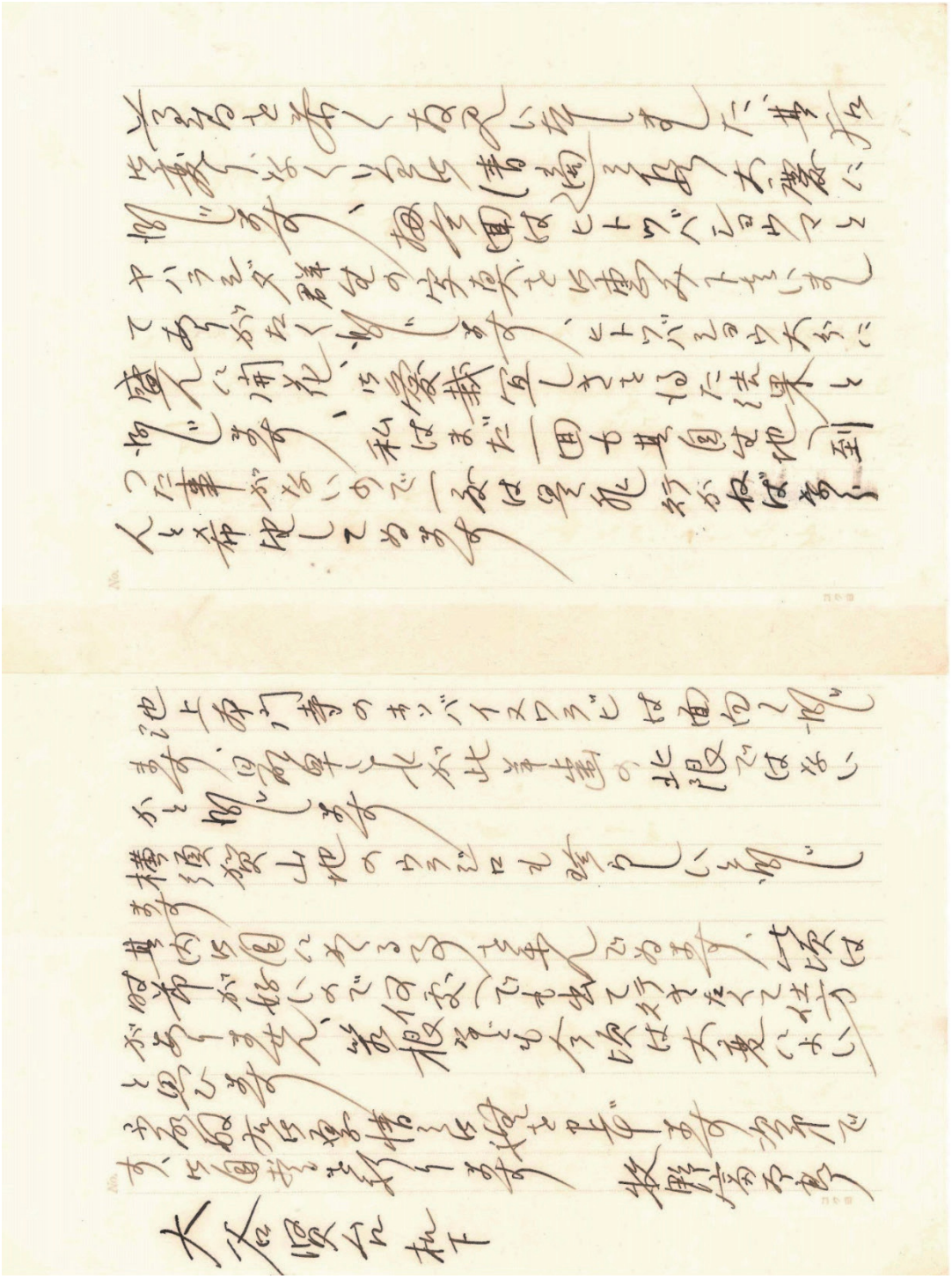
大谷貞雄

玉章

佐野高吉

SHIRAUME

②（昭和１５年（１９４０））５月２４日付手紙（植物写真恵贈くの御礼状）



③（昭和１５年（１９４０）５月３０日付（採集会お誘いに対する手紙）

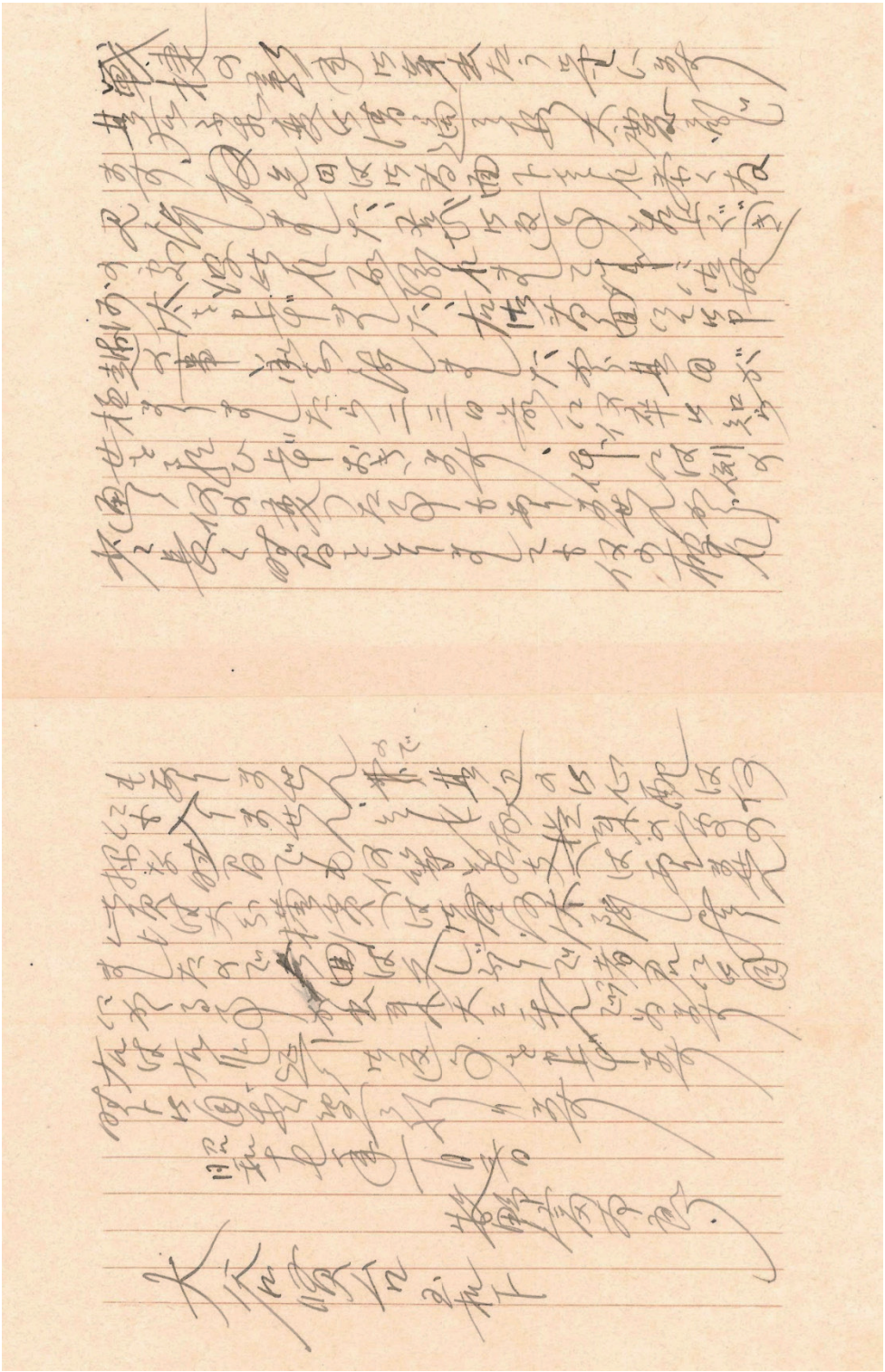
芳信を有難く拝見いたしました
扨今回ヒトワベセウマを見せてもらる採集
会催しのことを其日時を知らせて頂
戴に嬉しく存じます、然るに私は
愚妻来六月十五日後二十日までの間の何れ
かの日に東京を出発して大阪方面へ第3
事になつてゐますので堺市の六月廿三日も
同じく三十日も留守となります私の留守
は多分六月末か七月始めにかゝらうと存じ
ます、遅くはなり ますが七月の十日以後の何れか
の日曜日にでも私は堺に好都合です、どうぞ
その節御案内ひしたいと存じます
神中鉄道沿線鶴ヶ峰附近にカザグルマの
野生のある事はあつてよいと思ひます、此
は武蔵野平野でも沿線にあります
ようなお話迄ついでに書きました

五月廿日

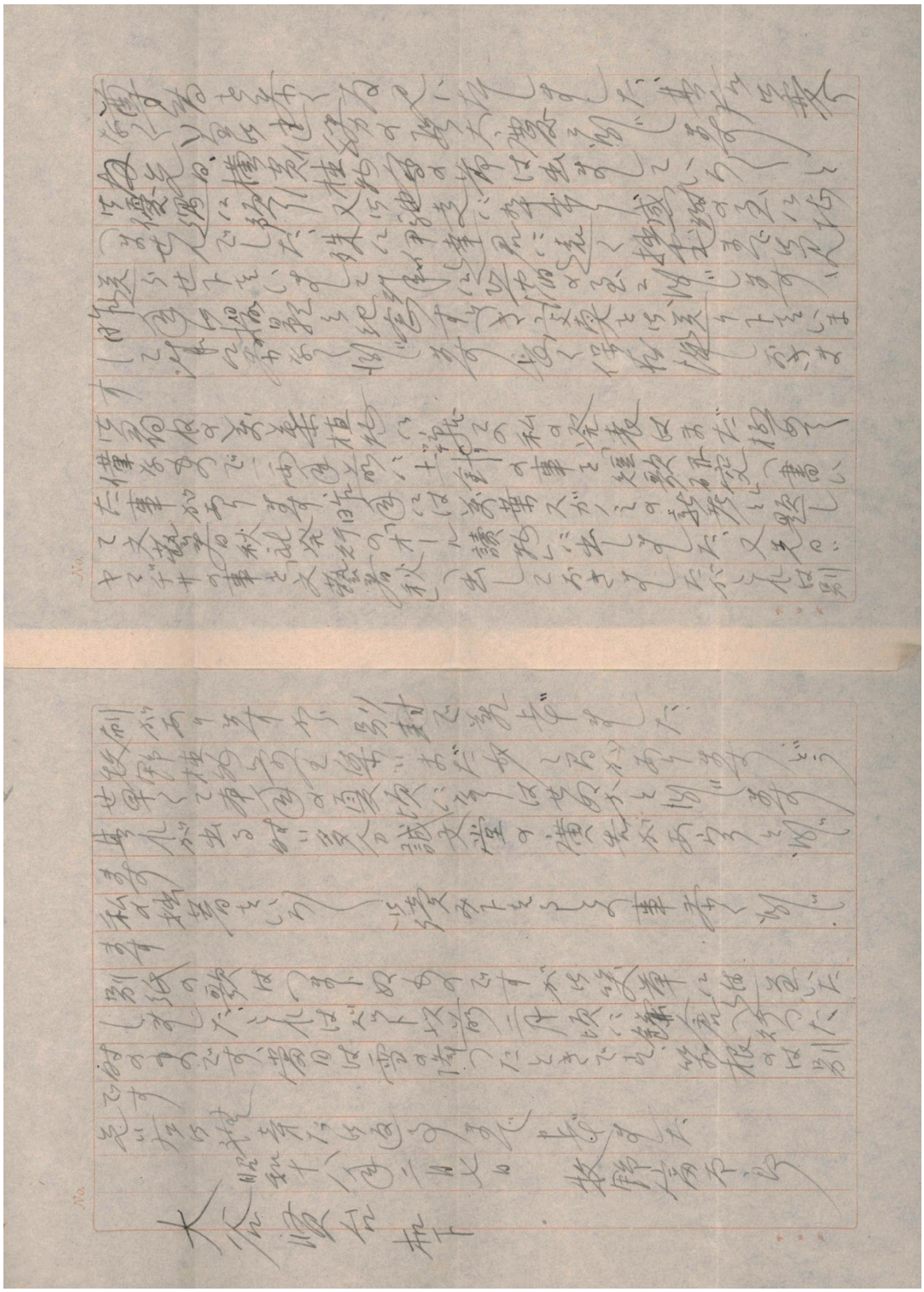
牧野富太郎

大谷貫蕊 様

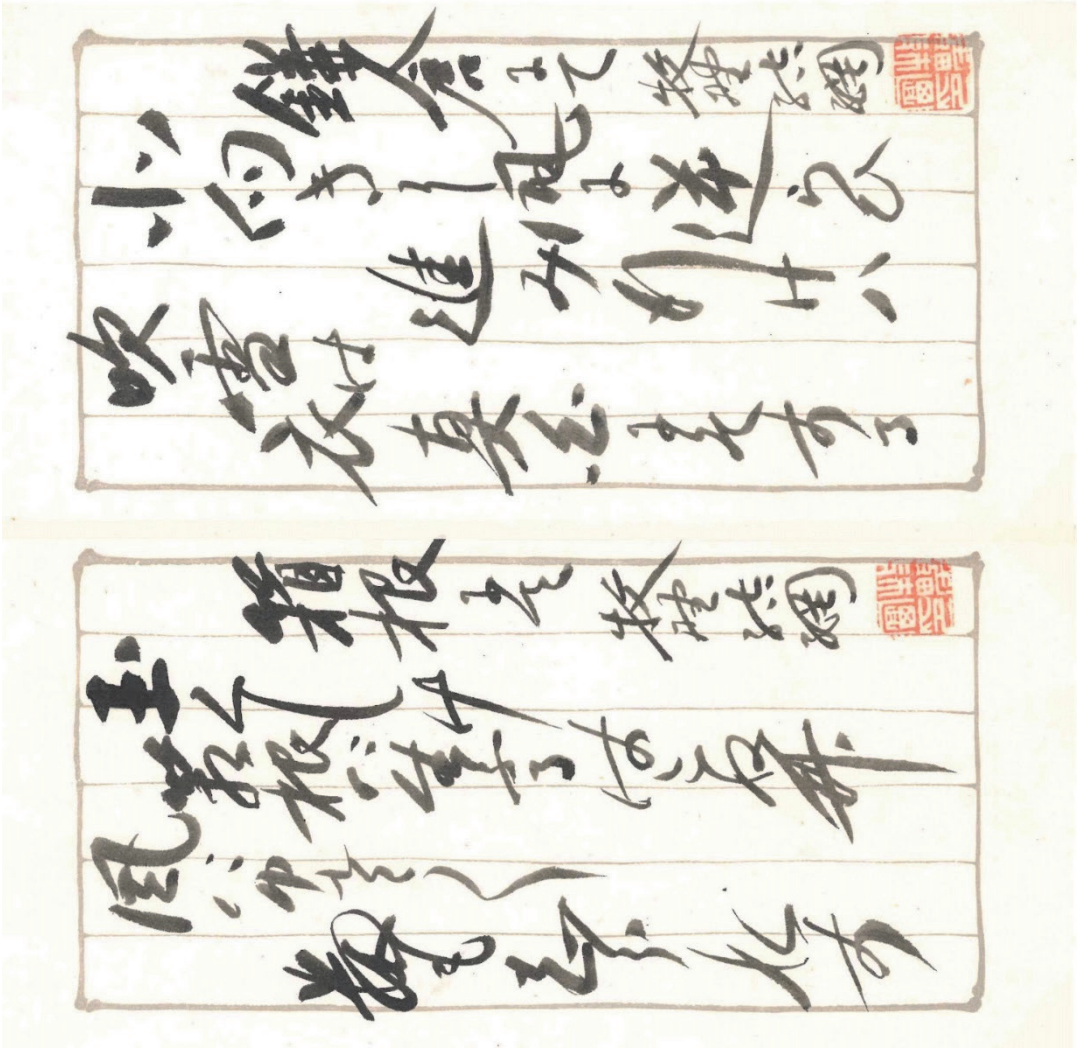
④昭和１７年（１９４２）１月３日付（戦時下での会合日程調整に関する手紙）



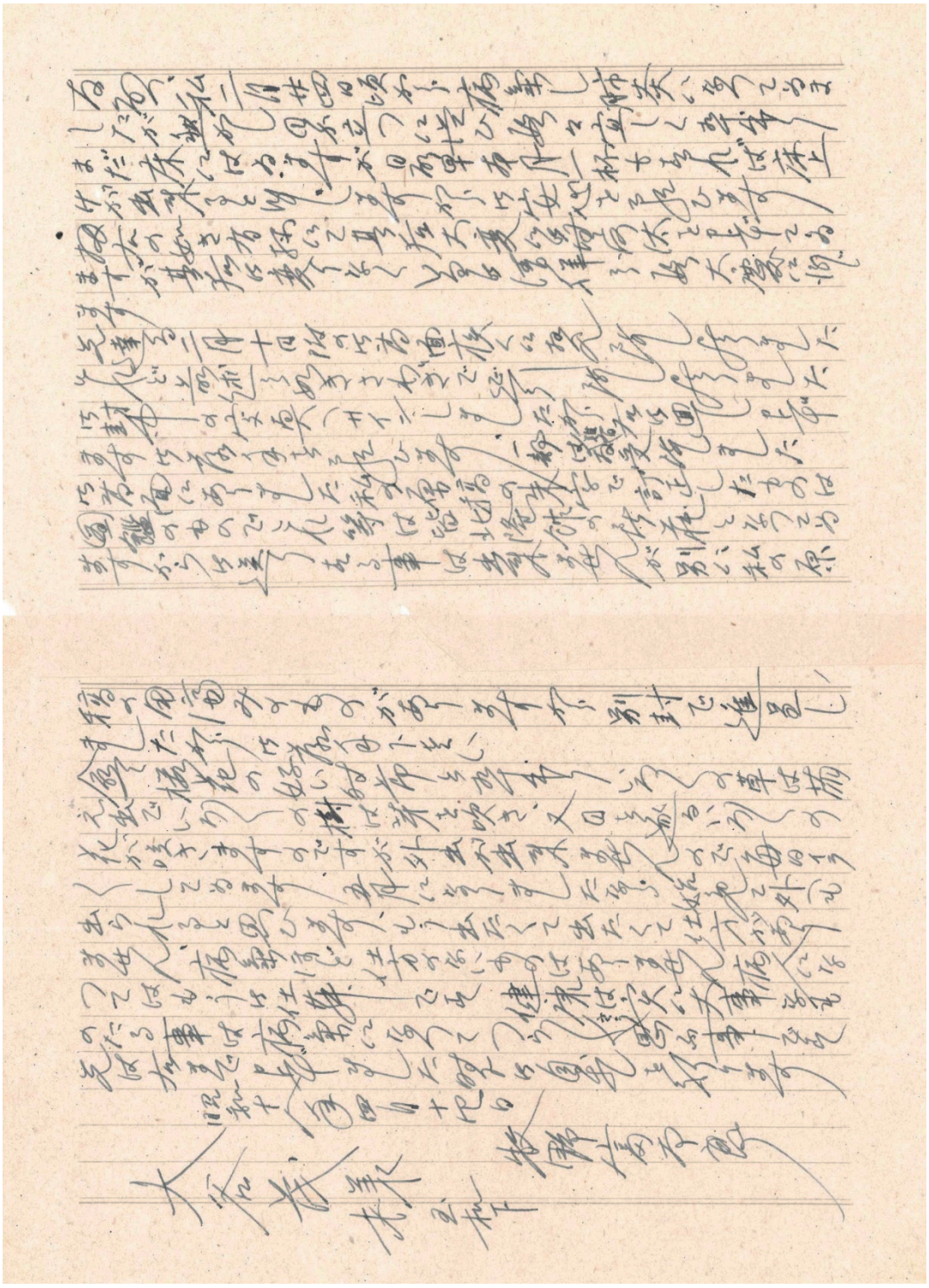
⑤昭和１８年（１９４３）２月７日付（横浜植物会での厚遇への御礼等に関する手紙）



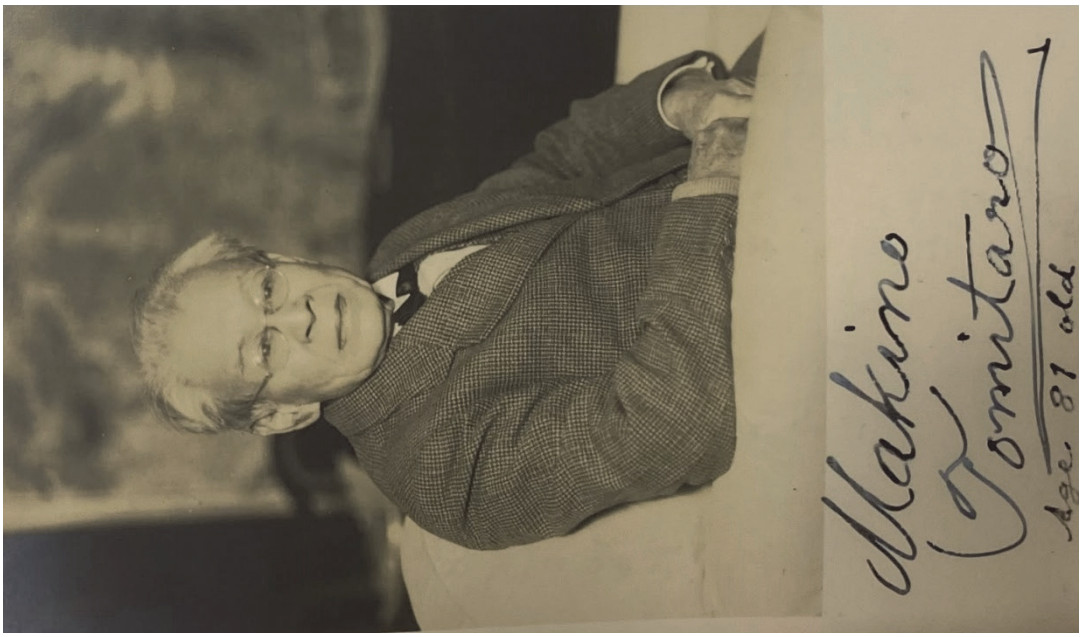
【別紙①】（右）牧野富太郎の句［鎌倉にて］、【別紙②】（左）同上［箱根にて］

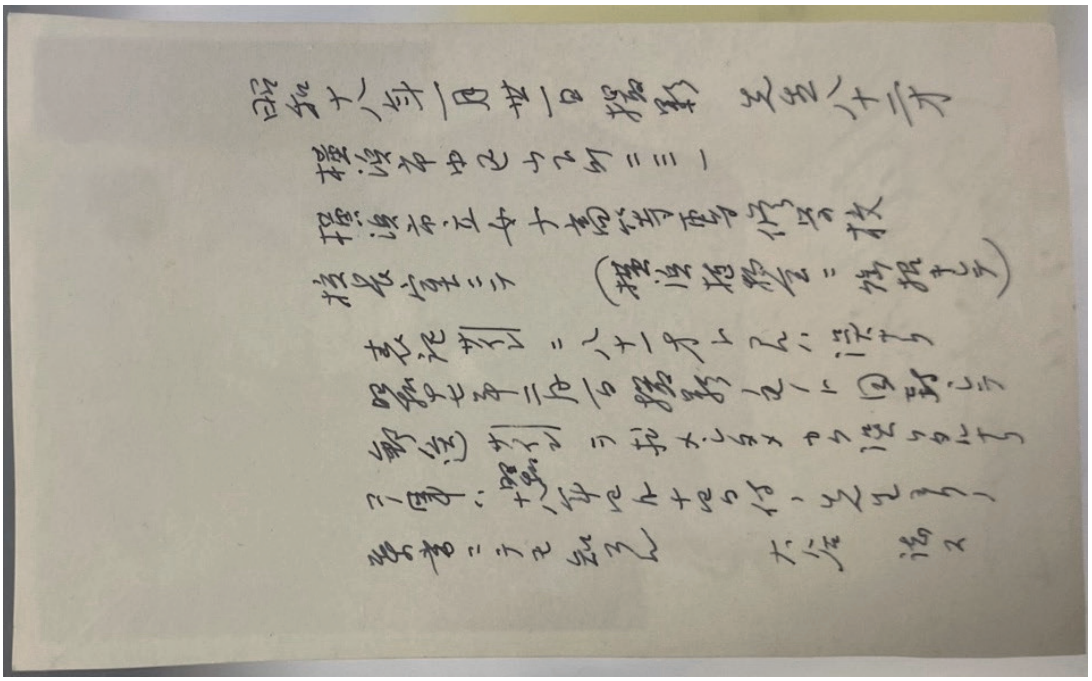


⑥昭和１８年（１９４３）４月１４日付（肺炎の病状等に関する手紙）

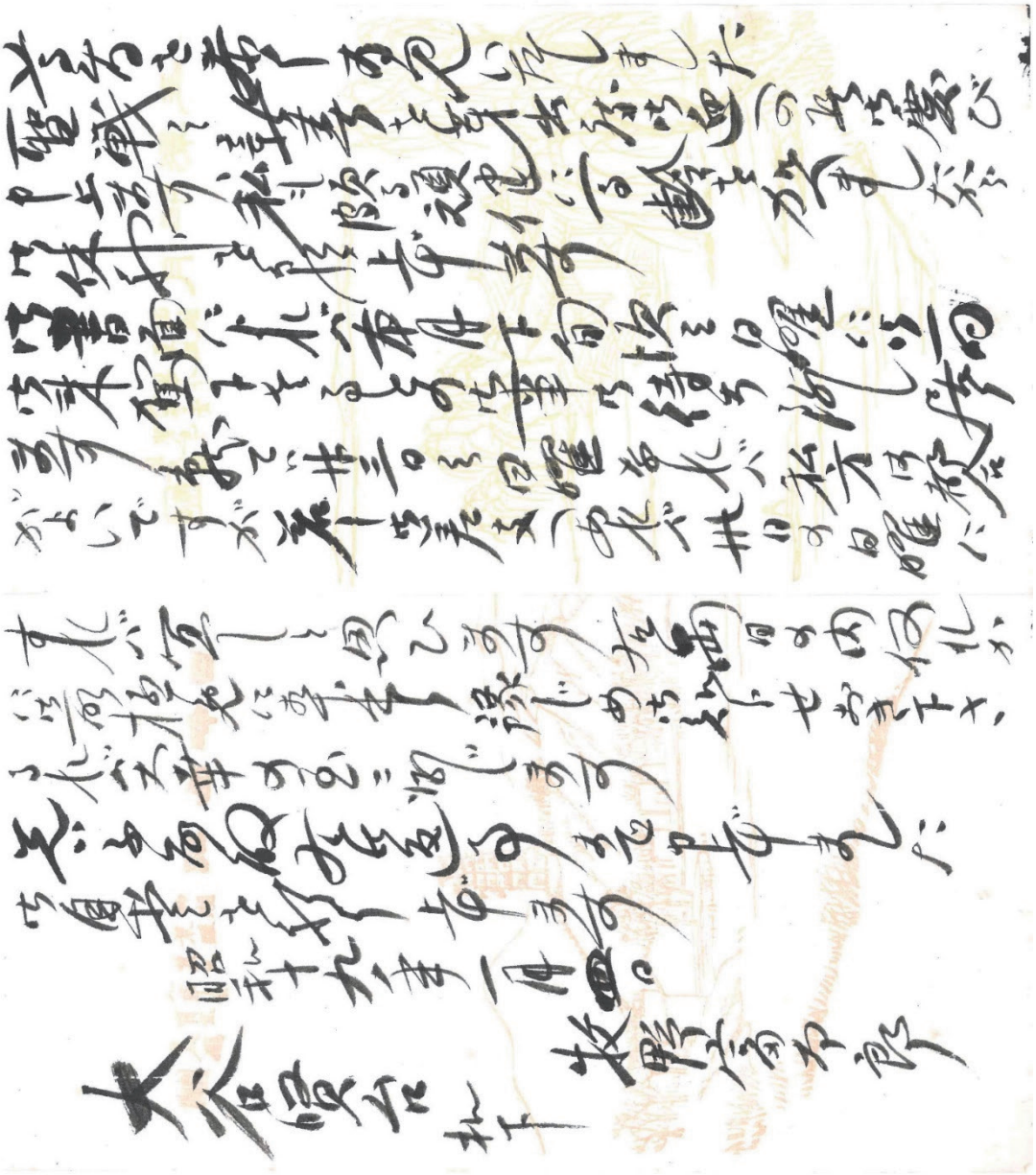


【別紙】（右）牧野富太郎のサイン入りの写真、（左）大谷による寄書

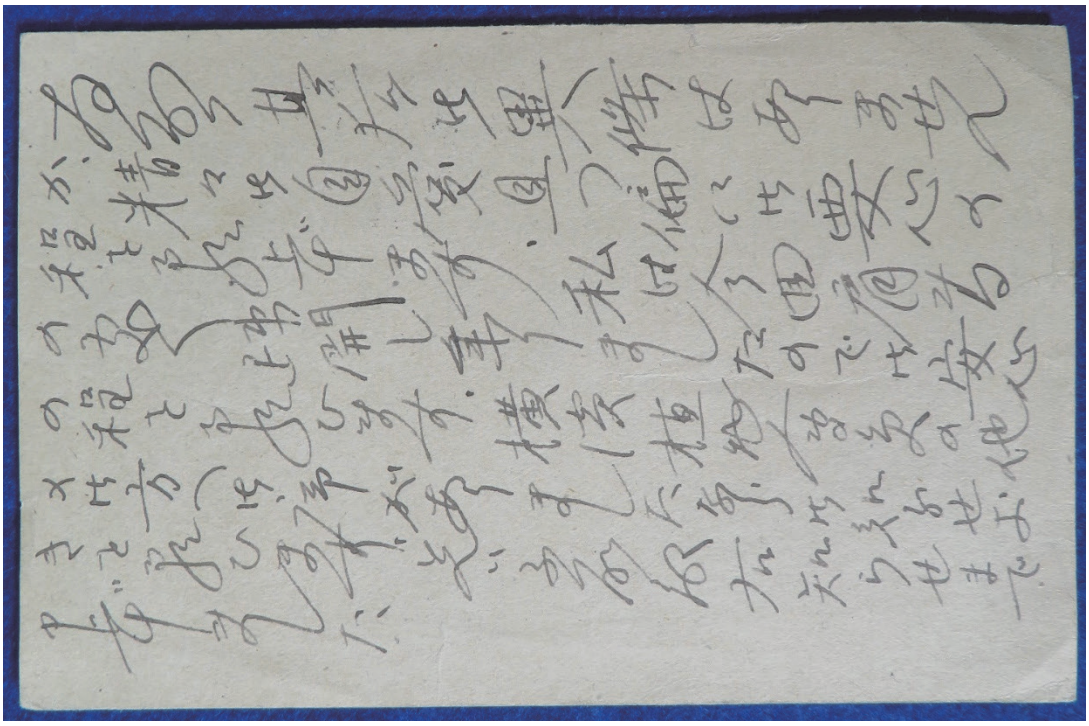




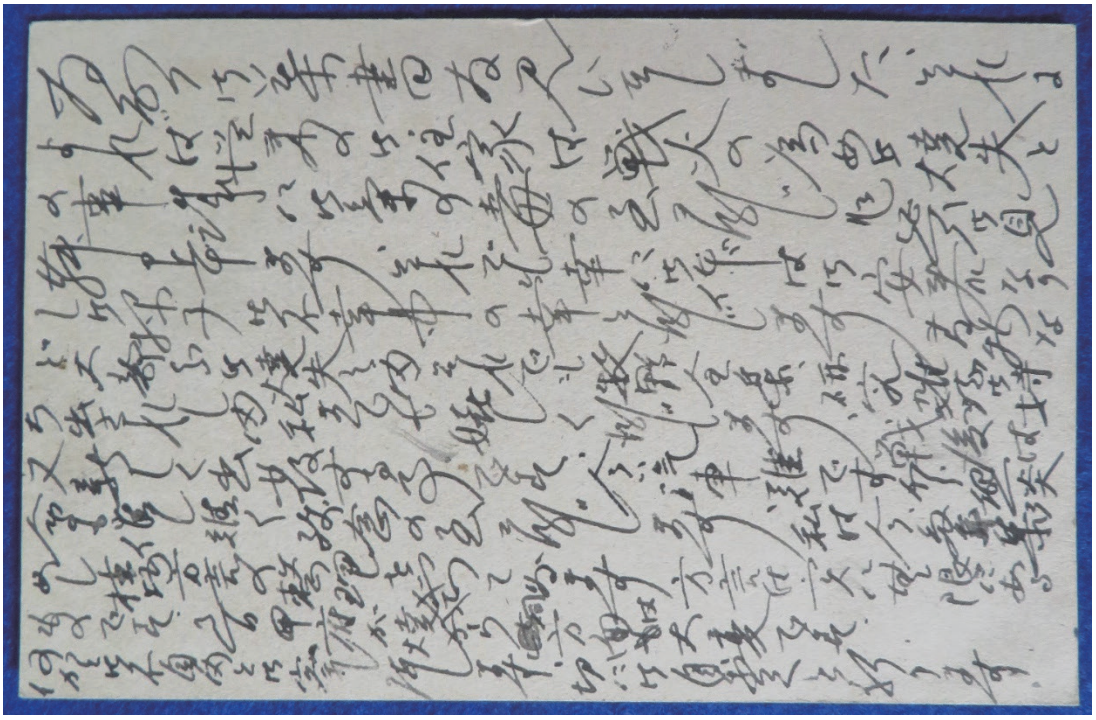
㋩昭和19年（1944）1月4日付（戦時下における一回来震の日程調整等に関する手紙）



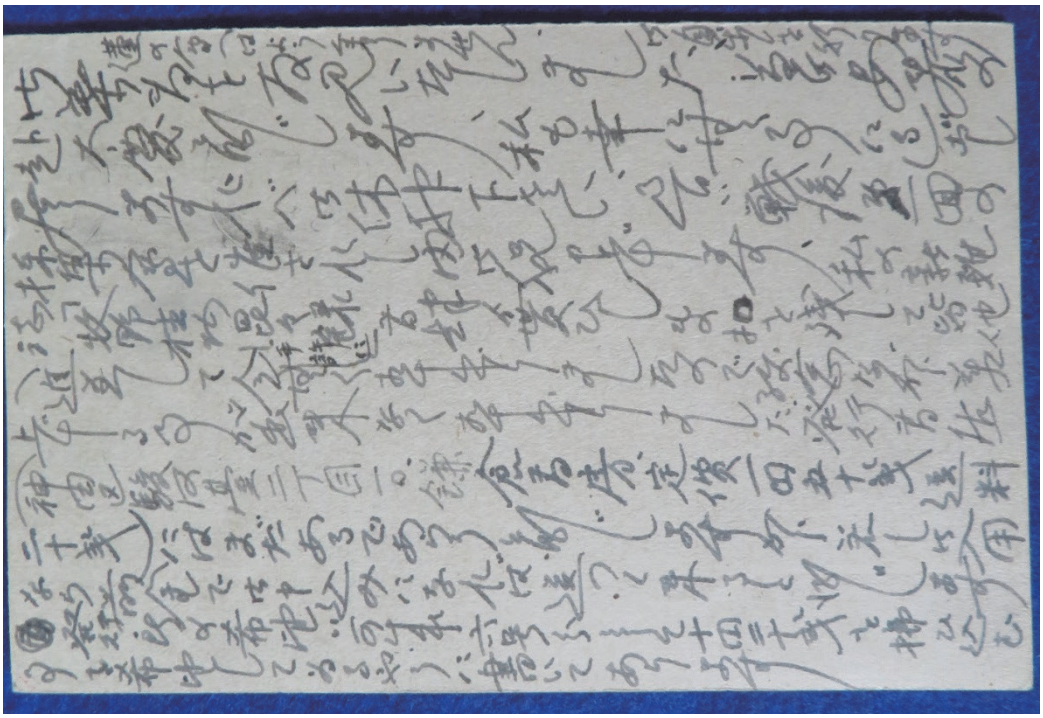
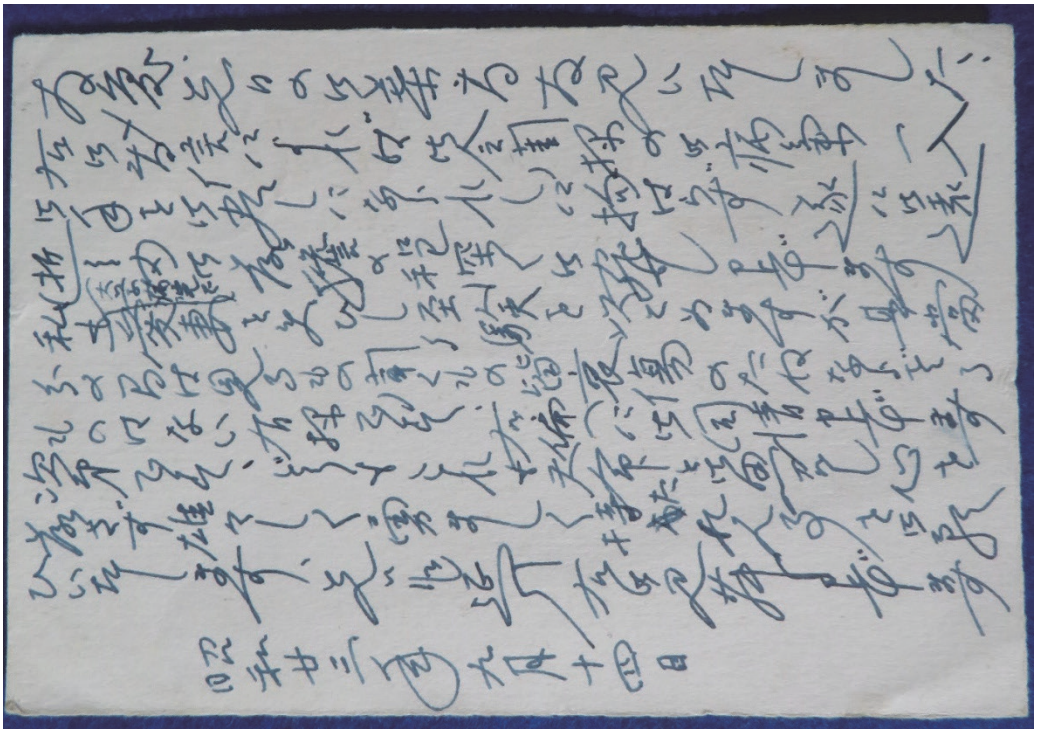
⑧昭和２０年（１９４５）５月２４日（疎開した旨を通知する葉書）



⑨昭和２０年（１９４５）７月１５日付（戦火による自宅焼失を見舞う葉書）



⑩（（昭和２１年（１９４６））６月２５日付）（「牧野植物混々録」所望につき葉書）



⑪昭和２３年（１９４８）９月１４日付（大谷氏妻逝去を見舞う葉書）